

F. ベーコンの劇場のイドラ

北 村 浩一郎

はじめに

F. ベーコンが、四つのイドラを提示し、それらを克服しなければ、真理の探求が困難になり、諸学の革新の妨げにもなるとしたことは、よく知られている。それらの四つのイドラとは、言うまでもなく、人間の本性そのものに起因する種族のイドラ (*idola tribus*) と個々人の特有な性質・教育・談話・読書等によって生じる洞窟のイドラ (*idola specus*) と人々の交わりや社会生活の中で言語が不適切に用いられることから起こる市場のイドラ (*idola fori*) と哲学の誤った諸学説やまちがった論証の法則から生じる劇場のイドラ (*idola theatri*)⁽¹⁾である。

これらのうち、ここでは、主として劇場のイドラを取り上げ吟味してみたいと思う。そうすることによって、われわれは、F. ベーコンの学問観を概観でき、何よりも、いろいろな問題をかかえている今日の哲学の在り方に有力な示唆を与えられ考えられるからである。

—

さて、劇場のイドラであるが、これは、先天的な人間固有の本性や個々人の特性とは関係なく、全く外来的なもので、大別すると、哲学者たちのさまざまな誤った学説に起因するものと誤った論証の法則とから生じるものがある。

そして、F. ベーコンによると、われわれにこの種のイドラを引き起こす哲学説や学派は、大きく三つの種類に分けることができる。

まず、第一は、合理派もしくは詭弁派とされる学説で、この立場の哲学者達は、経験から、いろいろのありふれた事例を、十分確かめることも、注意深く検討することもせずに取り上げ、あとは思索と精神の活動にゆだねてしまう。

次いで、第二は、経験派とされる学派で、この立場の哲学者達は、少数の実験を熱心にまた注意深く行なったのち、その実験から大胆にも哲学をうち立てようと企てる。そして、その他の事柄も、驚くべき仕方でも無理にゆがめてその実験結果に合うようにするのである。

さらに、第三は、迷信的とされる学派で、この立場の哲学者達は、信仰と敬神の念から哲学に神学や聖伝を混入する。なかには、虚妄がひどくて、学問を、霊や守護神から導き出そうとする人々もいるほどである。

以上、三つの立場に共通している点は、哲学が、十分な経験や自然誌の基礎のうえにうち立てられていないということである。そこに、劇場のイドラ(ないしは学説のイドラ—*idola theoriarum*—)⁽²⁾の生じる余地がある訳だが、この種のイドラは、従来数多くあったが、将来も一層多くなる可能性があるとされる。さらに、F. ベーコンによると、哲学の学説全体だけでなく、伝統と軽信と怠慢から固定した諸学の多くの原理や一般的命題によってもイドラが生じるとされている⁽³⁾。

ただ、ここでは、われわれは、さまざまな哲学説と誤った論証の法則に起因するイドラについて、さらに具体的事例を取り上げながら検討してみたいと思う。

二

まず、第一の種類合理派・詭弁派の代表的哲学者として、アリストテレスがあげられる。F. ベーコンによると、「かれはその論理学によって自然哲学を台なしにしてしまった⁽⁴⁾」し、「それをほとんど役に立たない論争的なものにしてしまった」(後出)のである。

つまり、アリストテレスは、世界をカテゴリーから作りあげ、人間の魂をも、最も高貴な第一実体であるにもかかわらず、第二志向の語によって定義される「類」に属すると考えている⁽⁵⁾。また、濃厚と希薄の問題も現実態と可能態という形式的な区別で片づけてしまうなど、無数に多くの事柄を、自分勝手な考えによって、事物の本性におしつけている⁽⁶⁾。

ロッシも指摘しているように、F. ベーコンにとって、アリストテレスは、「実験を既定の結論に適合させ、『カテゴリーから世界を構成し』、質料、運動、濃希といった問題を、『可能態』と『現実態』といった恣意的な区別だてによって解決しようとした⁽⁷⁾」のである。

そして、「アリストテレスは、迷信の汚染から自然哲学の純潔を守ろうとしたが、弁証法の危険と、学問を論理学に屈服させる同様の危険とを認めることはできなかった⁽⁸⁾」。

F. ベーコンによると、「アリストテレスは、いつでも、事物の内的真理をつかむことよりも、どうしたらうまく答えおおせるか、また言語のうえではっきりさせられるかということに苦心していた⁽⁹⁾」。そのために、「アリストテレスは、あらかじめ結論をきめていたのであって、結論をきめ一般的命題をうちたてるために、経験を適当に利用すべきであるのに、それを怠って、まず勝手気ままに結論をきめたのち、自分の考えどおりに経験をゆがめて、いわば捕虜のよう

F. ベーコンの劇場のイドラ

にひきずりまわすのである⁽¹⁰⁾」。

このようなF. ベーコンのアリストテレス批判が、当を得ているかどうかは検討の余地があるにしても、F. ベーコンにとって、アリストテレスの論理学は、経験(実験)によって得られる事物の本性を全く含まない空虚な言葉の操作であり、そこに「劇場のイドラ」の一つの原因があるとみなされているのである。

実際、ロッシも言うように、「F. ベーコンによると、アリストテレスは、あらゆる問題をたんなる言葉の手管で解決しようとする、ドグマ的哲学と詭弁的合理主義の一例であった⁽¹¹⁾」。

言うまでもなく、F. ベーコンは、アリストテレスの哲学をその根底に取り入れたスコラ哲学に対しても同様の批判をするが、前者が、より一そうとがめられるべきであるとしている。

ただ、しかし、われわれとしては、F. ベーコンの批判は、「アリストテレス哲学にむけられたというよりは、中世アリストテレス主義のある種の表現にむけられたものであった⁽¹²⁾」とする見解には十分注目し、検討しなければならないと考える。現に、坂本賢三氏は、「F. ベーコンはスコラのアリストテレス主義に対し妥協なく闘った⁽¹³⁾」としている。

ただ、一般的には、以下のようなファリントンの見解が、実状に即しているのではないだろうか。

つまり、「当時のF. ベーコンは、アリストテレスの哲学が人間生活にとって有用な所産をなにも一つとしてもたらさぬがゆえに、この哲学に反逆した。彼はアリストテレスの哲学が本来誤っていると考えていたのではなくて、自分自身のとは異なる目的のために企図されたものだ、と思っていたのである。アリストテレスの論理学は、F. ベーコンが『大革新』を執筆したころ、イングランドではもう約四百年間も研究されてきていた。それはこの国の精神生活にふかい影響をおよぼしていた。それは、F. ベーコンが言ったように、議論という点ではみのりゆたかなものであった。けれども、それは、まさにF. ベーコンが関心をもっていた問題、つまり生産にはなにも一つとして効果をあげたことがなかった。すなわち、それは新技術を生みだそうにも生みだせなかったのである⁽¹⁴⁾」。要するに、「アリストテレスの論理学は思考のための助力者であり、その目標は論理的な首尾一貫性にあった。F. ベーコンの論理学は行動のための導き手であり、その試金石はそれが仕事をしたかどうかにあった⁽¹⁵⁾」のである。

確かにF. ベーコンは、自分の取り上げた古人が少しも名誉をきづつけられないことにたびたび言及している⁽¹⁶⁾。それは、彼が行なったことが知力や能力の比較ではなく方法の比較であり、彼は裁判官の役ではなく、案内者の役だからである⁽¹⁷⁾。

この点については、ここで、これ以上立ち入る余裕はないが、いずれにしても、劇場のイドラの一因は、アリストテレスとその追従者に代表される合理派・詭弁派の哲学にあるとされる

のである。

次に、劇場のイドラをもたらず第二の種類哲学は、経験派の哲学である。これは、F. ベーコンを経験論の祖と位置づける通常の見方からすれば、奇異な感を与えるかも知れないが、彼が著しい例としてあげているのは、当時の錬金術師たちの諸説であり、しかも、「現在は、おそらくギルベルトゥスの哲学を別とすると、ほかに見出されない¹⁸⁾」としている。

つまり、F. ベーコンが劇場のイドラの原因の一つとする「経験派の哲学」の代表的事例は、端的に言えば、錬金術師たちの諸説とギルベルトゥスの哲学なのである。とくに、当時の注目すべき例は、おそらく後者のみであるとしている。

このような経験派の哲学は、狭くて暗い基礎にもとづいているために、上述の合理派・詭弁派の哲学よりももっと奇怪な説を生み出す。したがって、そのような哲学に毒されてしまった人々以外の人々には、信じがたい空虚なものに思われる。

しかし、それでも、F. ベーコンによると、このような哲学には、決して警戒を怠ってはならない。それは、「この種の哲学から重大な危険がおこることを、わたくしは予見し、予感するので、この悪弊に、もういまから対抗しておかねばならない¹⁹⁾」からである。

F. ベーコンの有名なアリとクモとハチの譬えによると、経験派は、アリのようにただ集めて使うだけであり、合理派は、クモのように自分自身から糸を出してクモの巣をつくりあげる。しかし、ハチは、その中間のやり方で、庭や畑の花から材料を集めてきて、自分の力で変え消化する。哲学の真の任務は、このハチのやり方によくにている。哲学は、単に精神の力にのみたよるのではなく、また自然誌や実験データをそのまま記憶に貯えるのでもなく、それらを知性で変化させ加工して貯えるのである²⁰⁾。

いずれにしても、F. ベーコンの真意は、ロッシが述べているように、「少数の性急な実験から、いかなる研究者もまじめにとりあげることができないような、完全な自然哲学を創造したと主張する不合理な哲学者を放逐するか、少なくとも無視すべきである。自然の偉大な書物の頁は、忍耐と尊敬をもって読まれるべきであり、一頁一頁たちどまって熟慮し、安易な解釈を排撃すべきである²¹⁾」ということに尽きるであろう。実際、われわれは、真の自然哲学を確立するためには、自然という書物を予断や偏見なしに誠心誠意精読しなければならないのである。

ところで、不可解なことに、上に述べた合理派・詭弁派の代表的哲学者アリストテレスと経験派の哲学者の例としてあげられた錬金術師やギルベルトゥスの哲学は、洞窟のイドラのなかでも、「もっとも警戒を必要とするもの、すなわち、知性を汚してその純粋性をなくするのにもっとも強い力をふるうもの²²⁾」としてあげられている。

つまり、F. ベーコンによると、洞窟のイドラは、「アリストテレスにおいてとくにあきらか

F. ベーコンの劇場のイドラ

に認められるのであって、かれはその自然哲学をその論理学に売りわたしてしまって、それをほとんど役に立たない論争的なものにしてしまった。また、錬金術師の連中も、少数の炉による実験から空想的でただ少数の対象にのみかかわる哲学をつくりあげた。なおまた、ギルベルトゥスも、磁石の研究に刻苦精励したのち、それからただちに、かれ自身がとくにたいせつだと考える対象にうまく合致するような哲学をつくりあげた⁽²³⁾」のである。

したがって、ここだけを見れば、「F. ベーコンはギルバート(ギルベルトゥス—筆者)の研究を洞穴のイドラの実例としている。すなわち、少数の実験から大胆に哲学を作り出す例としている⁽²⁴⁾」としても何の不都合も生じてこない。しかし、その一方で、しかも、同一の著書のなかで、上述のように、F. ベーコンは、アリストテレス、ギルベルトゥスの哲学はもちろん、錬金術師達の諸説は、劇場のイドラの著しい例ともしている。要するに、アリストテレスの哲学、ギルベルトゥスの哲学さらに錬金術師達の諸説は、洞窟のイドラであると同時に劇場のイドラの例としても示されているのである。

これは、F. ベーコンのイドラの区分に混乱があるといわれても仕方がない点であろう。

従来、F. ベーコンの四つのイドラとその区分さらに配列については、いろいろな指摘がなされている。

たとえば、石井栄一氏は、F. ベーコンのイドラが最初に見られる『時代の雄雄しい誕生』(1603年)以来の諸著作や断片を吟味しながら、「叙述の順序からイドラの体系的考察と配列との意図は推測できる⁽²⁵⁾」とする一方で、論理的一貫性が欠けていることも指摘している⁽²⁶⁾。

また、山崎正一氏は、「F. ベーコンのイドラに関する所説を比較したずねてみても、なかなか要領がつかめず、みればみるだけ紛糾してくるのが、F. ベーコンの所論の特徴である。四つのイドラは四つのままに放り出しておくにかぎる。その連関をあまり神経質に考える必要はない。四つの順序も結局は余り大したことではない—中略—このイドラの分類に関して、結局のところは、F. ベーコンのはなはだ手際のまずい分類操作の航跡を追求するという範囲を多く超え得ないであろう⁽²⁷⁾」と手厳しい。

いずれにしても、F. ベーコンの四つのイドラの区分は、厳密に検討した結果でてきたのではないというのが真相であろう⁽²⁸⁾。したがって、ここでは、見る視点によって、同一のものが洞窟のイドラとなったり劇場のイドラとなったりすることがありうるというだけにしておきたい。

さて、劇場のイドラを引き起こす第三の種類の哲学は、ピュタゴラスやプラトンとその学派に代表される迷信的哲学である。

F. ベーコンによると、この種の哲学は、広範囲にわたり、しかも大きな害悪をもたらして

いる。つまり、「迷信と神学の混入による哲学の腐敗はまったく広い範囲にわたるものであって、哲学の体系全体にもまたその部分にもじつに大きな悪弊を生じている²⁹⁾」のである。

そして、この種の哲学が広く大きな弊害を起こしているのは、人間の知性が、通俗的な概念におとらず、想像力の影響をうけるからだとされている³⁰⁾。つまり、この種の哲学は、空想的で誇張的でいわば詩的であり、われわれの知性に、よりいっそう「こびへつらい」、知性の野望を満たそうとするのである。

特に、ピュタゴラスの場合は、むしろ粗野で煩わしい迷信と結びついているにすぎないが、プラトンとその学派の哲学は、よりいっそう危険で巧妙である。

F. ベーコンによると、「質料から分離された形相(イデア界)」や「目的因」さらに「第一原因」を、しばしば中間因をはぶいて導入するようなことは、もっとも用心しなければならないことなのである。というのは、そこでは、誤謬の神格化や虚妄の崇拜が起こり、われわれの知性が疫病にかかってしまうからである。

F. ベーコンの立場からみれば、ロッシが述べているように、とにかく、「学問の目的は、プラトンにとっては、形相の発見であって—中略—形相は物質の抽象的、超越的実在であって、そこからスコラ思想の『形相』概念がでてきたのである³¹⁾」、そして、「F. ベーコンはまた、プラトンが学問と宗教を混同して双方を汚染した、という初期の非難を要約し、かつ敷衍した。形相が質料から分離されるというプラトンの理論は、かれの哲学を再起不能にまで腐敗させ、目的因の概念を自然学に導入した神学的形式の思弁に導くことになったのである。

なぜF. ベーコンが、プラトンにおいて、もっとも有害な哲学的疾病即ち『迷信的哲学』の例を見出したか、理解することは容易であろう。それは空想的、誇大、詩的である。それは精神に媚び、最高の精神すらとりこにする、とF. ベーコンは言う。ピュタゴラスもその疾病にかかったが、プラトンにおいては、それがもっと微妙で狡猾である。そのもっとも危険な徴候は誤謬の賛美である。なぜなら、いったん崇拜をよびさますことに成功すると、誤謬以上によく伝播するものはないからである³²⁾」。

このようなF. ベーコンのプラトン批判には、当然、異論の余地があるかとも思われるが、少なくとも、F. ベーコンにとって、プラトンの哲学は、大変危険で巧妙な、「迷信的哲学」の代表的事例であった。

以上によって、劇場のイドラを引き起こす哲学説つまり「合理派・詭弁派の哲学」と「経験派の哲学」と「迷信的哲学」の概要さらにそのイドラの成因が明らかになったと思う。

三

次に、劇場のイドラのもう一つの要因である「誤った論証の法則」(前出)について触れたいと思うが、その前に、「イドラを固定し、いわば永続化して、それらをとりのぞく道をふさぐ⁽³³⁾」とされる哲学の二つの放縦について取り上げておきたいと思う。

ここで、哲学の二つの放縦とされるのは、「同意」や「拒否」をする際の、哲学の独断的な傾向と懐疑的な傾向のことである。F. ベーコンによると、前者は、「すぐに決定を下してしまっ、諸学を断定的で独裁的なものとする人々の行き過ぎ⁽³⁴⁾」であり、知性を抑えつけてしまう。一方、後者は、「アカタレプシア⁽³⁵⁾を唱えて、いたずらに目標のない探求をはじめ人々の行き過ぎ⁽³⁶⁾」で、知性を弱らせるとされる。端的に言えば、一方は、独断的な哲学であり、他方は、懐疑論、(より正確に言えば蓋然論)である。

そして、代表的な具体例とてとしては、アリストテレスの哲学と新アカデミア派(New Academy)の懐疑思想があげられている。F. ベーコンによると、「アリストテレスの哲学は、他の哲学を、はげしい論破によってうちのめしたあと、一つ一つの問題について決定を下し、そしてまた、かれ自身勝手気ままに問題をおこさせたのち、何もかも確実に決定されたかのように、解決する⁽³⁷⁾」のである。他方、「新アカデミア派は、アカタレプシアをいわば定式化して、公然と唱えた⁽³⁸⁾」とされる。

つまり、F. ベーコンにとって、アリストテレスの哲学は、経験に基づく根拠をもたない、論理だけの徹底した独断論であり、哲学と諸学に大きな損害を与えたのである。他方、新アカデミア派の思想も、正しい原理から導かれたのではなく、「アカタレプシアの絶望」つまり、確実な真理は不可知とする絶望をもたらした。人間は、一度、真理の発見に絶望するとすべてのものに興味をなくし、厳しい探求の道からそれてしまうのである。

ただ、F. ベーコンは、後者に対しては、「アカタレプシアを唱えた人々の方法とわたくしのとる道とは、出発点においてはいくらか一致しているところもある⁽³⁹⁾」として、一定の共通点を認めながらも、「終極においては無限にかけ離れ、対立している⁽⁴⁰⁾」とする。

実際、この点に関しては、花田圭介氏が述べているように、「ベイコンは、古代の懐疑派、とりわけ新アカデミア派の原則留保、不可知論に一定の共感を示している。しかし、ベイコンは、原則判断の誤謬を恐れて心の安静を求めるために、原則の保留を好んだわけではなかった。そこで結局彼は懐疑主義にたいして、—中略—行き過ぎた『懐疑』を打ちたてるものだと非難する⁽⁴¹⁾」。

いずれにしても、哲学の二つの放縦つまり「安易な断定」と「無意味な懐疑」は、イドラを固定化し、それを取りのぞくことを不可能にするので、われわれの知性は、よほど用心をして、イドラから完全に解放され浄化されなければならないのである。

少し回り道をしたが、次に本題の「誤った論証の法則」について吟味してみたいと思う。

上述したように、劇場のイドラのもう一つの大きな要因は、誤った論証の法則である。F. ベーコンによると、誤った論証は、劇場のイドラの防壁であり、堡塁のようなものである。ところで、伝統的な論理学の論証は、世界を人間の思惟に、そしてその思惟を言語にひきわたし隷属させる以外はほとんど何もしない。つまり、従来の論理学の論証では、「世界」が、その言語や思惟に十分反映されず、単に言語もしくは論理上の「論証」にとどまっている。

現に、「感官とその対象から出発して一般的命題と結論に到達する全過程を通じて、われわれが使用する論証は、とかく欺きがちであり、また無力である⁽⁴²⁾」とされる。実際、まず第一に、われわれの感官が不完全で欺くことがあるとすれば、感官そのものの印象は、当然不完全であるが、何の補充も訂正もなされない。第二に、概念は、感官の印象から不正な仕方抽出され、不明確で混乱している。第三に、従来の帰納法は、除外や分解をしないで、単純枚举のみで学問の諸原理を決定するので正しくない。「単純枚举による帰納法は子どもじみたものであって、その下す結論はあぶなっかしく、矛盾的事例によってくつがえされることを免れない⁽⁴³⁾」のである。F. ベーコンが考えた新しい帰納法すなわち「諸学と技術との発見と論証に役立つ帰納法は、適当な排除と除外によって自然を分解し、そうしてから否定的事例を必要なだけ集めたのち、肯定的事例について結論を下さねばならない⁽⁴⁴⁾」。最後に、まず初めに、もっとも一般的な諸原理をうち立て、次に中間の命題がそれらの原理に合わされ、証明されるという、発見と証明の方法こそが、誤りの母であり、すべての学問の災いのもとなのである。実際、F. ベーコンによると「知性の個々の事例から、遠くにあってもっとも一般的といってよい命題(技術と事物の原理とよばれるもの)にまで一挙に飛躍して、それらの命題の不動の真理性によって中間の一般的命題を証明し説明することは、許されてはならない⁽⁴⁵⁾」のである。

感官によってとらえられた個別的なものから、一步一步順序正しく段階的に上昇することによって、中間の一般的命題をひき出し、最後にもっとも一般的な命題に達するのが正しい道なのである。

F. ベーコンによると、「諸学についての大きな希望は、正しい段階を、中断や杜絶なく、連続的に、個々の事例から低次の一般的命題へ、それから中間の一般的命題へと、つぎつぎに高次の命題へ上って、最後にもっとも一般的な命題に到達するようになるとき、はじめていただくことができる。というのは、もっとも低次の一般的命題は、なまの経験と大した相違はなく、

F. ベーコンの劇場のイドラ

またあの最高のもっとも一般的な命題(現在そうだと考えられている)は、観念的抽象的で実質のないものであるが、人間の仕事と運命がそれにかかわる中間の一般的な命題は、真実で、実質のある、生きたものであって、それらの一般的な命題のうえに、最後に、かのもっとも一般的な命題、すなわち、抽象的でなくて、これらの中間的な命題によって正しく限定された一般的な命題があるからである⁽⁴⁶⁾とされる。

先に述べた誤った論証の過程にあらわれる四つの欠陥を克服し、正しい手順をふんだもっとも一般的な命題と結論に到達すれば、われわれは、誤った論証の法則つまり劇場のイドラの防壁と堡壘を打ち破ることができるのである。そのためには、順序正しい経験(実験)が、何よりも大切である。経験こそが、最良の論証なのである⁽⁴⁷⁾。

ところで、F. ベーコンによると、われわれの精神がとりつかれているイドラには、外来的なものとし得的なものがある。「そのうち、外来的なものは、哲学者たちの学説と学派から、あるいは、まちがった証明の法則から人間の精神にはいつてくる。他方、生得的なものは、知性そのものに固有のもの⁽⁴⁸⁾」である。前者つまり「外来的なもの」は、上述したことから明らかのように、「劇場のイドラ」であり、困難ではあるがいろいろな手立てによってわれわれの精神からぬきとることが可能である。しかし、後者つまり「生得的なもの」は、どうしてもぬきとることができない。後者については、われわれは、「ただそれらのものを指摘し、そのような精神の陰謀に富んだ力に注意し、それを拒否する—中略—とともに、また逆に、知性は帰納法とその正しい形式とによるほかは判断することができないということをきっぱりと決定し確立するよりしかたがない⁽⁴⁹⁾」のである。後者については、すでに他で論及した⁽⁵⁰⁾のでここでは立ち入らないが、要するに、われわれの知性が、真理をとらえうようになるためには、知性をきよめて、(1)哲学者たちの諸説を論破し、(2)諸々の証明を論破し、(3)生得的な人間の理性を論破しなければならないのである。

ここで、われわれが吟味したのは、この(1)と(2)であり、(3)は上述のように、すでに他で論及した⁽⁵¹⁾が、主として、種族のイドラと洞窟のイドラの生得的側面に関することである。

四

上に明らかにしたように、劇場のイドラをもたらす三つの哲学説すなわち「合理派・詭弁派の哲学」、「経験派の哲学」そして「迷信的哲学」、さらに「誤った論証の法則」は、いずれも、順序正しい公正な経験・実験や自然誌に基づいていない点が共通であり、したがって、それらの思考や言葉には、それ相応の「内容」を欠いている。そして、その限りでイドラを生じさせ

ているのである。それらは、いずれも、いわば、世界経験の正当な内容をともなわない「思考」や「論理」によって成り立っている。そして、このことは、生得的なイドラ以外のすべてのイドラに当てはまることでもある。したがって、F. ベーコンは、事物そのものから集められ、十分に吟味された、いろいろな経験内容の確固たる基礎に基づいて、イドラから解放され、その上で、哲学やその他の学問を確立することを旨としたのである。

しかし、大変おかしなことに、あの有名なシュヴェーグラーは、『西洋哲学史』のなかで、「多くの鋭利で示唆に富む言葉が見出されるが、しかし厳密に言えばF. ベーコン哲学には内容といふものがない⁵²⁾」としている。これに対して、坂本賢三氏は、「F. ベーコンは、形式的な数学的自然学から内容を取り戻そうとすると、つねに想起され再評価されている思想家なのである。『内容が無い』どころか、それはつねに内容を求める哲学なのであって、それ故にこそアリストテレス主義に対してはその言葉の空虚さを、プラトン主義に対してはその思弁の空虚さを、批判の主要目標としていた⁵³⁾」と言っている。

また、福居純氏は、「ベーコンの《数学的自然学》は、数学が積極的役割を演じないが故に、純粋な機械論を生むことができなかった⁵⁴⁾」し、「ベーコンは機械論を垣間見たがそれを見抜く力をもたなかった⁵⁵⁾」としたうえで、「ベーコンが可能的に展開していた量の哲学は機械論的自然観として現実化されるに到る。それを果たしたのがデカルトとホッブズである⁵⁶⁾」としているが、坂本氏も述べているように、むしろ、F. ベーコンは、内容のない機械論に「内容」を盛り込むことをめざし、形式的な数学的自然学を現実の事物そのものに基づかせようとしたのである。

現に、F. ベーコンは、「哲学と諸学は、もはや空中に浮遊することなく、さまざまな経験とよく吟味され検討された経験との堅実な基礎のうえに立つようにいたしたいのであります。わたくしは、機関(ノヴム・オルガヌム)を提供いたしました。材料(内容—筆者)は事物自体から集められねばならぬのであります⁵⁷⁾」と言っている。そして、そのために、「精神と事物との交わり⁵⁸⁾」の回復に全力をかたむけ、「精神と宇宙との結婚の床を—中略—こしらえかざった⁵⁹⁾」としている。このようにして、F. ベーコンは、経験と知性を適正に結合し、したがって、「観照」と「行動」とをいっそう密接に結びつけ、真の哲学を確立しようとしたのである。そして、そこにこそ、F. ベーコンの再評価もしくは現代的意義が見られるのではないだろうか。

おわりに

確かに、「近代科学がF. ベーコンの方法ではなくガリレオの方法にしたがって育ったことは

事実⁶⁰」であり、「F. ベーコンが実験的方法を数学と方法論的に結びつけ、いま一步でガリレイのような方法論に到達しえたかもしれないとはいいがたい⁶¹」のも事実であろう。しかし、それにもかかわらず、「F. ベーコンの学問的意義」は、見失われてはならないのである。それは、単に「科学思想史上画期的であった⁶²」だけではなく、今日の諸学問にとって、忘れられてはならないのである。

よく言われるように、近・現代の諸学問は、一般に数学的物理学を模範として発展してきた。ところが、19世紀末から今世紀にかけて、たとえば、H. ベルクリンの哲学に見られるように、数学的物理学の限界(質的なもの、真の時間等々には的確に対応できないなど⁶³)が指摘されるようになった。そして、一般に、「二十世紀も後半に入ると数学的物理学の問題点が見えてくるようになった。それが、自然の抽象的なモデルにしか過ぎなくて、もっと具体的な人間環境としての『自然』ないし生活世界を人間と切り離さないでとらえようとするとき、無力であることが目につくようになった⁶⁴」のである。

そのような時に、「自然学からも道徳・政治哲学からも、空理空論を分離し、からっぽの無益なものいっさいを除去して、なかみのつまったものは何でも保存し、みのりの多いものは何でもふやして、知識を一中略一妻のように、子を生み、慰めを与えるためのものにする⁶⁵」F. ベーコンの哲学が、見直されつつあるのは、当然であろう。

ただ、F. ベーコンが、「諸学の正しい真の目標は人間の生活を新しい発見と資材をもって豊かにすること⁶⁶」とし、「諸学と技術との集積を増進することを自分の目標⁶⁷」としたことから、周知のように、ファリントン⁶⁸は、F. ベーコンを「産業科学の哲学者」と位置づけたし、他の「多くの現代哲学者たちは、F. ベーコンの哲学・科学観のうちに、近代産業社会を導く文化の創造発展の根源を見てきた。その結果は『技術万能』、画一主義、平均化、人間存在の破壊⁶⁹」等々にいたったとされているのである。

しかし、これは、F. ベーコンにとっては、まさに濡れ衣をきせられたようなものである。ロッシも言うように、「F. ベーコンはその生涯を通じて、科学や技術がそのまま人間の救済や解放を示すなどと信じたことは決してなかった⁶⁹」。実際、F. ベーコンは、「真理に対する永遠の愛のとりことなって、不確実で進みにくく道づれのない探求の道に身をまかせ⁷⁰」ながら、ある特定の学派や学説の基礎ではなく、人間の利益と偉大さとの基礎をきずこうと努力し、人類の福祉と向上を求めつづけたのである。

以上のようなF. ベーコンの哲学・学問観が、いろいろな問題をかかえている今日の哲学や諸学問にとって、きわめて示唆に富んでいることは言うまでもないだろう。

註

- (1) 劇場のイドラという名称の由来については、The Works of Francis Bacon, J. Spedding, R.L. Ellis, and D.D. Heath, eds. (以下、Works と略) vol. IV. P. 54, および、「川村学園女子大学研究紀要」第4巻 第1号(北村「イドラと知性」)3頁を参照のこと。
- (2) F. ベーコンは、劇場のイドラを学説のイドラとも言っている。Works, vol.IV. P. 63.
- (3) ibid. P. 55.
- (4) ibid. P. 64. なお、翻訳は、おおむね、『世界の大思想 6』(河出書房)所収の服部英次郎氏の訳にしたがった。以下も同様である。
- (5) アリストテレスは、『靈魂論』のなかで、「靈魂は実体、それも可能的に生命をもつ自然的物体の形相という意味での実体である」(『アリストテレス全集 6』一岩波書店—39頁)とか、「靈魂は可能的に生命を持つ自然的物体の第一の現実態である」(同上)と規定しているが、桂寿一氏によると、「この定義はそのままスコラ哲学に継承された。ところでこれを定義するのに、アリストテレスは『物体(実体)』や『現実態』等々の概念、いわゆる『類』から規定しているので、本来『第一実体』的なものである『靈魂』をば第二実体的な語によって規定することを避難したもの」(F. ベーコン著 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』一岩波文庫—220頁)である。
- (6) Works, vol.IV. P. 64.
- (7) パオロ・ロッシ著 前田達郎訳『魔術から科学へ』(サイマル出版社) 73頁。
- (8) 同上。
- (9) Works, vol.IV. P. 64.
- (10) ibid. P. 65.
- (11) パオロ・ロッシ著 前田達郎訳『魔術から科学へ』(サイマル出版社) 73頁。
- (12) 同上書 74頁。
- (13) 坂本賢三著『人類の知的遺産 30 ベーコン』(講談社) 38頁。
- (14) B. ファリントン著 松川, 中村訳『フランシス・ベイコン—産業科学の哲学者—』(岩波書店) 122頁。
- (15) 同上書 123頁。
- (16) Works, vol.IV. P. 41, P. 52, P. 62 etc.
- (17) ibid. P. 52.
- (18) ibid. P. 65. なお、すでに、1605年の『学問の前進』のなかで、「人々は自分の思索や意見や学説を、自分がかつとも感心した考え方やもっともよく研究した学問の色に染まらせ、他のいっさいのものにも、その学問の色をつけた」のは誤りであり、その実例の一つとして、「錬金術師は溶鉱炉の二、三の実験から哲学をつくりあげ、わが国人ギルベルトゥスは磁石の観察から哲学をつくりあげた」例が示されている。
- (19) ibid.
- (20) ibid. PP. 92~93.
- (21) パオロ・ロッシ著 前田達郎訳『魔術から科学へ』(サイマル出版社) 33頁。
- (22) Works, vol.IV. P. 59.
- (23) ibid. P. 59.

F. ベーコンの劇場のイドラ

- (24) 石井栄一著 『ベーコン』(清水書院) 182～3頁
- (25) 石井栄一著 『フランシス・ベーコンの哲学』(有信堂) 259頁
- (26) 同上書 260頁.
- (27) 山崎正一 「フランシス・ベーコン—生涯と思想—」(『世界の思想 6』—河出書房—所収) 478頁.
- (28) 桂壽一 「ベーコンの『イドラ』説について」(『日本学士院紀要』第三十四巻 第三号所収) 147頁参照.
- (29) Works, vol.IV. P. 65.
- (30) ibid. PP. 65～66.
- (31) パオロ・ロッシ著 前田達郎訳 『魔術から科学へ』(サイマル出版社) 68頁.
- (32) 同上書 68～69頁.
- (33) Works, vol.IV. P. 69.
- (34) ibid.
- (35) Acatalepsia は、英訳では to deny that we can know anything となっているが、不可知性のこと。これを唱えるのは、不可知論または一種の懐疑論の人々で具体的には、後述のように、新アカデミア派をさす。
- (36) Works, vol.IV. P. 69.
- (37) ibid.
- (38) ibid.
- (39) ibid. P. 53.
- (40) ibid.
- (41) 花田圭介著 『ベイコン』(勁草書房) 87頁.
- (42) Works, vol.IV. P. 70.
- (43) ibid. P. 97.
- (44) ibid.
- (45) ibid.
- (46) ibid.
- (47) ibid.P. 47.
- (48) ibid.P. 27.
- (49) ibid.
- (50) 「イドラと知性」(前出) 3～6頁.
- (51) 厳密には、同上 9頁参照。なお、この点に関しては、上注(27)の山崎正一氏の論文も参考にされたい。
- (52) シュヴェーグラー著、谷川、松村訳 『西洋哲学史 上巻』(岩波書店) 306頁.
- (53) 坂本賢三著 『人類の知的遺産 30 ベーコン』(講談社) 39頁.
- (54) 福居純 「理性の体系(一)—ベイコン、デカルト、ホッブズ—」(『岩波講座 哲学 17—哲学の歴史 II』—岩波書店—所収) 66頁.
- (55) 同上.
- (56) 同上書 67頁.
- (57) Works, vol.IV. P. 12.
- (58) ibid.P. 7. これは、服部氏によれば、事物の本性が、そのあるがままに知性の認識となることで、そのような完全な認識を、人間は墮罪前にもっていたが、墮罪とともに失ったと信ぜられていた。なお、

本論では、F. ベーコンの宗教論には立ち入らないことにする。

- (59) *ibid.*P. 27.
- (60) 坂本賢三著 『人類の知的遺産 30 ベーコン』(講談社) 18頁.
- (61) 前田達郎 「レトリックと方法—F. ベーコンの二つの顔—」(『新岩波講座 哲学 15 哲学の展開 哲学の歴史 2』—岩波書店—所収) 79頁.
- (62) 同上.
- (63) Henri Bergson; *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889 参照.
- (64) 坂本賢三著 上掲書 18頁.
- (65) *Works*, vol.III. PP. 294~5.
- (66) *ibid.* vol.IV. P. 79.
- (67) *ibid.*PP. 79~80.
- (68) パオロ・ロッシ著 前田達郎訳 『魔術から科学へ』(サイマル出版社) 2頁.
- (69) 同上書 3頁.
- (70) *Works*, vol.IV. PP. 18~19.